

受動化と使役化における格役割の動的配分

加藤 弘・佐藤 滋

東北大学留学生センター・大学院国際文化研究科

〒980-77 仙台市青葉区川内

E-mail: {kato, sato}@intcul.tohoku.ac.jp

話者が自分の心の中や外界を見る場合、そこには事物とそれらの状態、時間と空間が認識される。事物が相互にかかわり合うことによって生起する事態を因果関係として捉え、それを述語によって言語化する過程がある。各事物の事態の中での意味役割は、日本語の場合は格助詞が担うが、日本語文の意味を因果性の観点から観察すると、格助詞がプロトタイプの意味役割から逸脱した用例を持っている場合が多い。格助詞はそれが付与される名詞と述語間の文法関係をどのような状況認知に基づいて表現しているのだろうか。ここでは、因果関係に基づき格役割を初期設定する空間があって、受動化・使役化のような認知方式を変更する操作は因果関係を保存しながらその空間上で事物を再配置すると考える。格助詞の形式上の差異は、同一あるいは類似の事態を話者が異なった認知的角度から見ていることに起因する。本稿ではこのような因果空間上で受動化・使役化を行うことによって名詞の格役割が動的に決定されることを示す。特に、ガ格の動作主性、ニ格の源泉性の程度が受動化・使役化と述語の性質に依存していることを示すことよって一見多様な任務を帯びているとみられる格助詞の働きがどのようにして付与されるか的一端を明らかにする。

Dynamic Case Role Assignment in Passives and Causatives in Japanese

Hiromu Kato and Shigeru Sato

International Student Center and

Graduate School of International Cultural Studies

Tohoku University, Sendai, 980-77 Japan

E-mail: {kato, sato}@intcul.tohoku.ac.jp

We frequently find instances in Japanese where the use of particles deviates from the prototypical semantic roles. What sort of event cognition is involved in expressing grammatical relations between the predicate and the nouns followed by case particles *ga*, *de*, *wo*, and *ni*? The speaker recognizes an event generated in the time-space where causal relations hold among the participating objects. Our assumption is that there is a space where the initial case roles are given to the nouns, that their relocation takes place in the process of cognition-modifying operations such as causativization and passivization, and accordingly that particular assignment of the case particles implies the difference in the speaker's cognition of the event reflected in semantically equivalent or nearly equivalent expressions. In this paper we propose a case role assignment model that explains dynamic determination of case roles in the derivation of passive and causative constructions. Consequently, systematic explanation becomes possible for the seemingly versatile functions of the particles. Specifically, the degrees of agentivity of *ga*-NP's and reciprocity of *ni*-NP's are discussed in the causal space in terms of the behavioral patterns of the objects in passivization and causativization.

1. はじめに

話者が自分の心の中や外界に生じる事態を言語形式にのせて表現しようとするとき、事態の生起の多様性にくらべて、言語形式の取り得る選択肢はきわめて限られている。このような形式上の限界の一例として、少数個の格助詞に事態に参加する事物間の多様な関係を表現させていることがあげられる。このような世界には、事物間に生起する事態を事物間の因果関係として捉えて、それを格助詞で表示し、述語によって命題表現に持ち込む過程がある(Croft 1991, 1994; Talmy 1976; 山梨 1994)。各事物が事態の中で担う役割は、このような過程の中で決定されるが、このような格助詞の初期値を深層格と呼んでいる(Nilsen 1972)。

日本語文の意味を因果性の観点から観察すると、格助詞はそれぞれプロトタイプ的な意味役割から逸脱した用例を多数持っている。格助詞「が、で、を、に」はそれが付与される名詞と述語間の文法関係をどのような状況認知に基づいて表現しているのだろうか。事態に関与する事物をそれぞれの助詞が、充当化や直接受動化などの認知方式の変更の操作に対応して異なった観点から機能分担的に格表示することによって類似的な事態を表している(加藤・佐藤 1995)。このような助詞交替現象の背後には、同一の事態を別の観点から描き、その差異を格助詞に担わせて表層構造に転換する過程が働いていると考えられる。本報告では、因果空間内に初期設定された事態とその中で因果関係の認知的観点が受動化と使役化という操作を通して変化し、それに従って動的に格助詞が変更付与されていく過程を考察する。この中で、受動文と使役文における二格名詞句の目標性/源泉性、ガ格名詞句の動作主性の度合いなどに統一的に言及することが可能になる。

2. 因果空間

因果空間：事物間の関係を原因と結果として記述する述語を含む命題，例えば，

- (1) 子供がハンマーで貯金箱を壊す
- (2) 父が車で客を駅に送る

を事物間の因果関係から見ると、(1)は「この事態を生起せしめる事物(子供：動作主)が動作主の繰る媒体(ハンマー：媒体)を介して動作の対象(貯金箱)を破壊する」ことを表しており、同様にして、(2)も「父(動作主)が車(媒体)を介して客(動作の対象)を運び、その結果として駅(事態結果物)と合

体させる」ことを表しており、格助詞が、デ、ヲ、二がこの順序でこの事態の因果関係を支えている。これらの例の場合、「壊す」、「送る」が物理的な因果の連鎖を記述する。さらに所有関係や時空間上の位置および移動関係を表す述語もあり、言語認知系はこれらをも因果関係に投影して把握することを可能にしている(Croft 1991; Talmy 1976)。これに基づいてCroft (1991)は、始点を動作主(主格)にして、媒体(具格)、被動作主(対格)、結果(与格)とする格関係記述のための因果連鎖モデルを提案している。本稿では、話者の認知世界から切り取られた事物が取り込まれ、述語と組み合わせられ、深層格付与が行われる空間を因果空間と呼ぶ。図1にその模式図を示す。そこでは深層格標識としての格助詞が設定されたあと、受動化、使役化などの認知方式の変更操作に伴い、実際の発話文に至るまでに動的に格助詞付与が行われる。この過程を明らかにすることで、同一あるいは類似の意味を持つ文の間の格交替現象を説明することができる。これらの操作は事物間の因果関係を保存しながら、事態に対する認知的観点を交える働きをするものと思われる。

格の初期設定：深層格として格文法(Nilsen 1972)では動作主格、直接目的格、道具格、経験者格を設定しており、これらはそれぞれ、伝統的な主格、対格、具格、与格に対応している。主格と対格以外を斜格と総称することがある。同時に、格助詞ガ、デ、ヲ、二の意味的プロトタイプは、それぞれ主格、具格、対格、与格の格役割に対応し、図1のスロットO1~O4は左からそれに対応している。矢印はその方向に因果関係が流れることを示す。4つのスロットには左から次のような認知特性を持った事物が入る：動作を起こし事象を生起せしめるもの(主格)、動作主の行為を動作の対象へ受け継ぐもの(具格)、動作の作用をこうむるもの(対格)、動作の結果生じるもの(与格)。事物はこれらのスロットを充当化、受動化、使役化などの操作を受けて移動する。

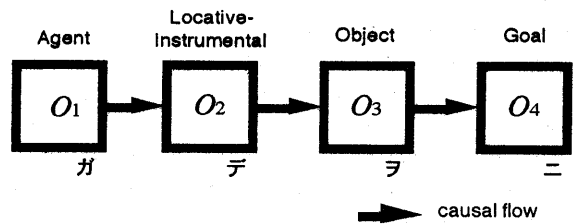


図1. 因果空間モデルと格役割の初期設定

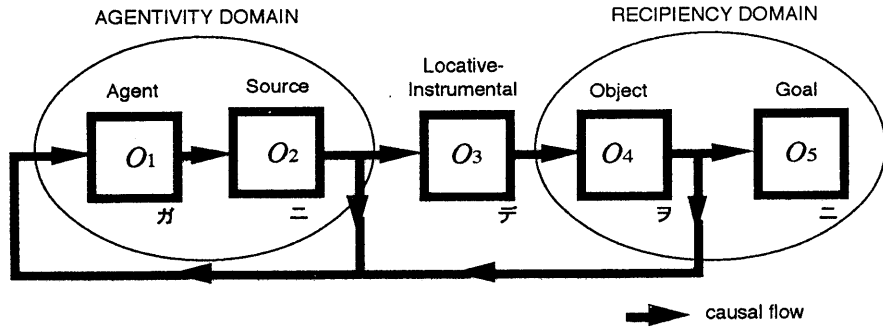


図2. 受動化と使役化における因果関係と格役割

他動性：話者の周囲に起こる事態は、なんらかの原因あるいは起動力が引き起こすものとして捉えることができる。これは、言語表現上では他動詞表現によって表される。また、それに対応する受動化表現にも別の視点から同一の因果関係が反映している。さらに、使役化表現も他動詞によるものと類似の因果関係を形成する。日本語では、受動化と使役化の操作が語彙化以前に行われることが多いため、因果関係を因果空間での初期状態のまま表す他動表現と受動化・使役化の操作を被った後との判別が難しい。例えば、文(3)-(6)の例を見ると、

- (3) 友達を車にのらせる
- (4) 友達を車にのせる
- (5) 馬をトレーラーにのせる
- (6) 荷物をトラックにのせる

(3)の「のらせる」は「のる」にいわゆる使役の助動詞がついて成立した統語的な使役形である。(4)-(5)の「のせる」は「のらせる」の縮約形であるが、形態上は(6)の他動詞「のせる」と同じになる。文(3)-(6)は構文的には名詞句の配置をふくめて差異がなく、意味上も差異が小さい。例えば(5)が使役文か他動詞文かを決定することは難しい。これらの例でのヲ格名詞は格役割の初期設定で最初からこのような格助詞付与がなされたのか、あるいは使役化操作によってガ格スロットから移動したのかは決めがたい。

受動化：受動化は、他動詞文ではガ格の事物を二格に移し、ヲ格あるいは二格の事物をガ格の位置に置く操作である。日本語では明示的な受動形態素ラレを使わなくても受動表現が可能である。因果関係上、受動である動詞が「教わる、授かる」など多数が語彙化されているが、それぞれ「教える、授け

る」の受動形と見ることができる。このような動詞の場合にも同様な移動が行われる。また、自動詞文ではラレを使って「泣く／泣かれる」のように受動化することができるが、これを被害受動と呼んでおく。その際にはガ格の事物が二格に移動する。

使役化：使役化は、ガ格の事物を二格あるいはヲ格に移動し、空所となったガ格スロットに新たな動作主を導入する操作である。この場合も使役形態素サセを用いなくて、「見せる、乗せる」のように因果関係上の使役を表す他動詞が語彙化されている例が多数あり、サセを用いた使役化と同じ格助詞付与過程を経る。

充当化は図1の因果空間上で、初期設定された格役割を変えずにヲ格と二格を占める事物を左方に1スロット移動する操作であった(加藤, 佐藤 1995)。これに対して、受動化と使役化は、図1の空間上で格役割と因果の流れの追加といった対応を持つ操作である。具体的には、図2に示すようにガ格の格役割がガ格と二格とに分割され、二格とヲ格からガ格へ向かう因果連鎖ループが追加される。これについ

(1)	先生が	数学を	生徒に	教える
	生徒が	数学を	先生に	教わる
(2)	太郎が	ケーキを	花子に	あげる
	花子が	ケーキを	太郎に	もらう
(3)	資産家が	お金を	銀行に	預ける
	銀行が	お金を	資産家に	預かる

図3. ガ格／二格交替の受動化

て次節で詳述する。

3. 格役割の動的配分

因果空間では、入ってきた事物を因果関係に基づいて格助詞を付与するが、このとき設定された格役割のままの文を初期文と呼ぶことにする。実際の発話では、初期文がそのまま現れることもあるし、充当化、受動化、使役化などの操作を受け、プロトタイプ的な格解釈では説明できない格役割配分が行われる場合もある。日本語では因果関係を直接的に反映した初期文は意味的または統語的に異常になる場合があり、これが格助詞の機能を系統的に解明する上で問題点となっている。以下では、初期文が受動化と使役化を経る場合の格関係をガ格の動作主性の強さと二格の源泉性・目標性の有無に焦点をあてて格交替現象を観察する。そして格助詞ガ、デ、ヲ、ニの多様な役割が、因果空間での格役割の初期設定、受動化・使役化という因果関係の認知方式の変更操作から導出できること、認知方式の変更は図2に示される因果空間上での事物の移動で示され、

(1)	胃病が	私を		苦しめる
	私が		胃病に	苦しむ
(2)	(Xが)	胃病で	私を	苦しめる
	私が	胃病で		苦しむ
(3)	雨が	服を		濡らす
	服が		雨に	濡れる
(4)	(Xが)	雨で	服を	濡らす
	服が	雨で		濡れる
(5)	風が	草木を		揺らす
	草木が		風に	揺れる
(6)	(Xが)	風で	草木を	揺らす
	草木が	風で		揺れる

図4. 受動化による二格/デ格名詞の意味役割の対比

(1)	(Xが)	車を	太郎に	ぶつける
	車が		太郎に	ぶつかる
	太郎が		車に	ぶつかる
(2)	(Xが)	ボールを	人に	当てる
	ボールが		人に	当たる
	(人が)	ボールに		当たる

図5. ガ格/ヲ格・二格交替の受動化

かつ因果関係は保存されること、を示す。

ガ格/二格交替の受動化：図2での受動化における事物のふるまいは、基本的に左から右方向へのものであり、右端からは左端へ連続する。次の文(7a)はその初期文(7b)から導出されるが、図2での動きはガ格(O1)名詞の隣接の二格スロット(O2)への移動と右端二格(O5)名詞の左端ガ格スロット(O1)への移動である。

(7a) 生徒が数学を先生に教わる

(7b) 先生が数学を生徒に教える

ここでは二格(O2)からガ格(O1)への経路で因果関係が保存される。なお、ヲ格名詞の格役割は変わらない。次に、図3にガ格/二格交替の受動化の例をあげる。ここでは、ガ格名詞の動作主性が低くなり、二格名詞の源泉性が高くなるが見えてとれる。

ニ/デ名詞句の認知的差異：次の文(8a),(9a)の「車に」と「車で」はそれぞれの初期文となるべき(8b),(9b)での違いを反映していると考えられる。

(8a) 子供が車にひかれる

(8b) 車が子供をひく

(9a) 子供が車でひかれる

(9b) (Xが)車で子供をひく

すなわち、(8)では受動化によって「車」がガ格から源泉二格に移動し、「子供」がヲ格からガ格に昇格

(1)	(Xが)	教室で	会議を	する
	会議が	教室で		ある
(2)	(Xが)	交差点で	事故を	起こす
	事故が	交差点で		ある
(3)	(Xが)	机を	教室に	置く
	机が		教室に	ある
(4)	(Xが)	彼を	医者に	する
	彼が		医者に	なる

図6. 動作主Xが起動する事態の受動化としての存在/変化述語

する。しかし、移動後も二格名詞からガ格名詞への因果の流れは下側の経路で確保される。これに対して、(9)では「車」は初期文の位置(デ格)から移動せず、「子供」が受けるべき因果の流れの元の事物は言語的に明示化されない。これと類似の事態認知が図4の例文にあり、それぞれ初期文と派生文を示す。ただし、図4の例では名詞句「(Xが)」は仮想的な動作主で、受動文で動作主性を持たない。

受動文での動作主性の消滅：(10a),(10b)は初期文(10c)から派生されると考える。

- (10a) 車が太郎にぶつかる
- (10b) 太郎が車にぶつかる
- (10c) (Xが)車を太郎にぶつ
ける

ヲ格名詞句の「車」をガ格スロットに移動した(10a)では「車」の動作主性は消滅するが、二格に残った「太郎」の目標性は維持され、初期文の因果連鎖が保存される。これに対して、(10b)では(10c)のヲ格「車」、二格「太郎」がそれぞれ源泉二格、ガ格に移動し、下側の因果連鎖経路によって因果関係を保持し、「車が太郎に向かってやってくる」という認識を表すことができる。図5はガ格/ヲ・二格交替により導出される受動文で、動作主性が失われる例をしめす。また、存在や変化を表す「ある」、「なる」は、それぞれ「する/置く/起こす」、「する」の深い認知レベルでの受動化と考えることができる。図6にこれらを含む初期文と派生文をあげた。これらの受動文でも動作主性は失われる。

図2の因果空間上のガ格と源泉二格を含む領域を動作主領域、ヲ格と目標二格を含む領域を被動作主領域と呼ぶ。受動化における名詞のふるまいの特徴は、動作主領域内でのガ格から二格への移動および被動作主領域から動作主領域への移動である。前者において、動作主領域内で動作主性がO1からO2へ移動する、後者は認知的により明解な動作主領域への移動であるが、実際の動作主性は失われる。

被害の受動：以上、他動性を基礎とした因果関係を受動化というフィルタを通しての格交替の中に見た。これに対して、日本語には「被害の受動」と呼ばれる受動化があり、自動詞でも受動形態素ラレを用いて受動化が可能である。例えば、

- (11a) 運動会が雨に降られる
- (11b) 雨が降る
- (12a) 兄が弟に泣かれる
- (12b) 弟が泣く

では、初期文(11b)、(12b)から受動文(11a)、(12a)が導かれる。これを図2のモデル上で見ると、ガ格名詞が源泉二格に移動し、ガ格スロットに事物が新規に導入され、源泉二格名詞からガ格名詞への因果の流れが成立する。すなわち、(11a)では「雨に」よって「運動会が」影響を受け、(12a)では「弟に

(1)	父が 死んだ	(私が) 父に 死なれた
(2)	隣人が 深夜まで 騒いだ	(私が) 隣人に 深夜まで 騒がれた
(3)	(業者が) マンションを わが家の南側に 建てた	(私が) (業者に) マンションを わが家の南側に 建てられた
(4)	(Xが) バスで (私の)足を 踏んだ	(私が) (Xに) バスで (私の)足を 踏まれた

図7. 被害受動化

(1)	弟が ファミコンを する	兄が 弟に ファミコンを させる
(2)	生徒が グラウンドを 走る	先生が 生徒に グラウンドを 走らせる
(3)	秘書が 電話を 銀行に かける	社長が 秘書に 電話を 銀行に かけさせる

図8. 二使役化

泣かれる」ことで、「兄」は何らかの被害を受けることが暗示される。因果空間への事物の新規導入というパターンは使役化にも共通するもので、認知上の違いは受動ではガ格名詞に動作主性がないか、または希薄であるのに対して、使役化ではガ格に導入された新規事物が動作主となる点である。被害の受動化を通じて、認知空間内での受動化は使役化につながっていく。次の例で両者の異同を検討する。

- (13) 弟が自転車を壊した
- (14) 弟が自転車を押した
- (15) 兄が弟に自転車を壊された
- (16) 兄が弟に自転車を押しもらった
- (17) 兄が弟に自転車を押させた

(13)と(14)はどちらも「弟が自転車にある種の作用を及ぼした」という事態を表している。この二つの事態に新規に「兄」が導入されると、(15)-(17)のような表現が成立する。この3つの文の因果関係は図2のモデルで見ると、被害の受動文(11a)-(12a)と同じパターンの格交替であるが、(15)-(17)の間にガ格名詞「兄」の意味役割上の動作主性・被害者性の度合いに差異を見ることが出来る。(15)から(17)への順序で「兄」の持つ被害者性は減少し、逆

- (1) 弟が 泣く
兄が 弟を 泣かせる
- (2) 病気の生徒が 帰る
先生が 病気の生徒を {帰らせる, 帰す}
- (3) 一万人のファンが コンサートに 集まる
歌手が 一万人のファンを コンサートに {?集まらせる, 集める}
- (4) 女の子の人气が 歌手に 集まる
歌手が 女の子の人气を (自分に) {?集まらせる, 集める}
- (5) 犯人が 自宅に 現われる
犯人が (自分の)姿を 自宅に 現わす
- (7) 太陽の姿が 水平線上に 現われる
太陽が 姿を 水平線上に 現わす
- (8) 横綱の体調が くずれる
横綱が 体調を くずす
- (9) 犯人が 逃げる
警察が 犯人を {?逃げさせる, 逃がす}
- (10) スキーで 足が 折れる
(私が) スキーで 足を 折る

図9. ヲ使役化

- (1) 弟が ファミコンを する
兄が 弟に ファミコンを させる
- (2) 生徒が グラウンドを 走る
先生が 生徒に グラウンドを 走らせる
- (3) 秘書が 電話を 銀行に かける
社長が 秘書に 電話を 銀行に かけさせる
- (4) 弟が 買物に 行く
兄が 弟に, を 買物に 行かせる
- (5) 子供が プールで 遊ぶ
母親が 子供に, を プールで 遊ばせる
- (6) 学生が 講堂に 集まる
先生が 学生に, を 講堂に 集まらせる
先生が 学生を 講堂に 集める
- (7) 観客が 舞台上に 上がる
俳優が 観客に, を 舞台上に 上がらせる
俳優が 観客を 舞台上に 上げる

図10. ニ/ヲ使役化

に動作主性は増大する。

使役化：使役化ではガ格に動作主が新規に導入されるが、その際、初期文でのガ格名詞は源泉二格かヲ格に移動する。それぞれ「二使役化」、「ヲ使役化」と呼ばれる。二格にある事物はヲ格のものより動作主性が高いと考えられている。次の文(18b)~(18d)はそれぞれ(18a)から派生した被害受動文、二使役文、ヲ使役文である。図7-9はそれぞれこれらの例文である。

- (18a) 弟が泣く。
(18b) 兄が弟に泣かれる
(18c) 兄が弟に泣かせる
(18d) 兄が弟を泣かせる

また、次の文(19)のように二格、ヲ格のいずれも可能な使役文もある。図10にニ/ヲ使役文の例を挙げる。

- (19a) 子供がプールで遊ぶ
(19b) 母親が子供に,を)プールで遊ばせる

図2の因果空間での使役化の動きのパターンは、まずガ格名詞が二使役では源泉二格に、ヲ使役ではヲ格に移動する。さらにガ格スロットに新規に事物が入り、動作主となる。使役化ではニ/ヲ格に移動した名詞が動作主性を保持するため、因果連鎖はガ格名詞に環流する。これは行為を強要する主体であるガ格名詞に、使役化が何らかの作用を及ぼすという認知的な意味を表示している。

再帰的他動表現：「家を焼く」とか「足を折る」などの表現は、「焼く」、「折る」の一般的な用法とは異なり、自分の意思で引き起こした事態ではない。このような文の認知的な構造は、その背後にある因果連鎖の中に動作主Xを設定し、その事態の効果の最終的な引き受け手としての被動作主を設定することによって説明することができる。

- (20a) 戦災で家を焼いた
(20b) 戦災で家を焼かれた
(20c) Xが戦災で私の家を焼いた

初期文(20c)があり、二格に「私」を想定する。(20b)はその受動化であるが、(20a)は動作主X

が希薄なため、因果連鎖が「震災」のところから表現されたものだと考えられる。述語は「焼いた」と「焼かれた」で異なり、因果の経路も異なるが、因果関係が同じために類似の現象認知を表す。

4. おわりに

事態に参加する事物間の因果関係に基づいて格役割を初期設定する空間を想定し、これを因果空間と呼んだ。受動化・使役化のような認知の方式を変更する操作は因果関係を保存しながらその空間上で事物を再配置すると考え、その結果として生じる格役割の再配置の仕組みを考察した。格助詞の形式上の差異は、同一あるいは類似の事態を話者が異なった認知的角度から見ていることに起因すると思われるため、この再配置の仕組みを明らかにすることによって多重化した複雑な機能を持つ日本語の格助詞の働きを説明することが可能になる。また、日本語では受動化・使役化は対応する形態素ラレ・サセのみによって可能になるのではない。深い意味の世界での認知方式に自由な変更が見られ、それが専用形態素を用いない形での受動・使役の豊富な語彙化を行っている。存在の表現も広く考えると、動作主Xによって起動された事態の受動化と見ることができ。このような観点から、多くの事例を検討した。

本稿ではこのような因果空間上で受動化・使役化を行うことによって名詞の格役割が動的に決定されることを示した。受動化と使役化の行われる因果空間では、これらの操作による格スロット間の事物の移動が、それぞれに特徴的なパターンを持つことを明らかにした。すなわち、受動化はガ格名詞の源泉二格への移動とヲ格/目標二格名詞のガ格への昇格に特徴づけられる。また、使役化はガ格名詞の源泉二格/ヲ格への移動とガ格スロットへの新規事物の導入を伴う。また、受動化と使役化は被害受動を通

じて連続しており、被害受動は空間上での移動パターンの中では使役と同じであるが、新規導入されたガ格名詞に動作主性がない。受動と使役の差異は、事物の新規導入の有無とガ格名詞の動作主性の度合いに求めることができる。二格の源泉性はいずれの場合にも初期文より強くなる。

今後の課題として、類似の助詞体系を持つ朝鮮語の形態素との格役割の比較を行い、ここで述べた因果空間の有効性と一般性の検証を考えている。

謝辞 本研究の一部は文部省科学研究費(No. 06232211)の援助による。

参考文献

- Croft, W. (1991). *Syntactic categories and grammatical relations*. University of Chicago Press, Chicago.
- Croft, W. (1994). "Voice: beyond control and affectedness." Fox, B. and P. J. Hopper (eds.) *Voice: form and function*. Benjamins, Amsterdam, 90-117.
- Nilsen, D.L.F. (1972). *Toward a semantic specification of deep case*. Janua Linguarum, Series Minor, 152. MoutonThe Hague.
- 加藤弘, 佐藤滋(1995)."格助詞「が, で, を, に」の動的付与過程モデル." 言語処理学会第1回年次大会発表論文集, 373-376.
- Talmy, L. (1976). "Semantic causative types." Shibatani, M., (ed.) *Syntax and Semantics*, vol. 6, The grammar of causative constructions. Academic Press, New York, 43-116.
- 山梨正明(1994)."日常言語の認知格モデル." 月刊言語, 23 (1-12).